

講演 3

L003



◆座長

おおやま てつお
大山 哲生

(日本大学歯学部 診療准教授〈歯科補綴学第Ⅱ講座〉)

略歴

1991年 日本大学歯学部卒業／1995年 博士(歯学)(日本大学)／日本磁気歯科学会理事, 日本顎顔面補綴学会理事

磁性アタッチメント義歯を
成功させるための術式と考え方

◆講師

おおくぼ ちかひろ
大久保 力廣

(鶴見大学歯学部 教授〈有床義歯補綴学講座〉)

日本の磁性アタッチメントは世界的にも卓越した高性能医療機器であり、オーバーデンチャーの可撤性支台装置として広く有効利用されている。磁性アタッチメントの特長として、①長期に持続する恒常的吸引力、②有害な力を支台歯に伝達しない、③適応範囲が広い、④定位置に戻る復元力、⑤小スペースで適用可能等が挙げられる。特に支台歯にとって有害な側方力や回転力が作用すると、磁石構造体はキーパー上を滑走するか、あるいは簡単に結合を解除するため、「支台歯に優しい」支台装置として多くの臨床家から高い評価を得ている。また、フリクションを応用したアタッチメントに比較して義歯の着脱が容易であり、手先の不自由な高齢者にとっても好ましい支台装置といえる。

一方、磁性アタッチメント製作時には、機械加工されたキーパー表面を汚染、変形させないように、従来の鑄接法ではなく、接着性レジンを使用したキーパーボンディング法が推奨されている。また高い吸引力を得るためには、磁石構造体の正確な義歯床への取り付け操作が極めて重要であり、エアギャップが生じないように慎重に行わなければならない。磁石構造体の変位防止や確実な接着のために、ハウジングの応用や義歯床への通路の付与等の術式も必要である。

磁性アタッチメントの安全性や有用性に関しては、多くの基礎研究により立証されており、長期にわたる成功症例の報告から、歯根およびインプラント双方に対する本アタッチメントの信頼性は非常に高まっている。今日では、従来の根面板形態のアタッチメントだけでなく、よりリジッドなテレスコープ仕様や分割義歯、顎顔面補綴装置等にも応用されており、磁石を利用した歯科治療の裾野は大きな拡がりを見せ、今後もさらなる普及が期待されている。

磁性アタッチメントのISO規格は日本磁気歯科学会が提案策定したものであり、通常は企業が保有するISO規格も本学会が所有している。また、令和2年度診療報酬改定に向けた医療技術評価に関しても、保険医療材料制度等に準じて対応を行うとされており、近い将来の保険導入の可能性も見えてきた。

そこで本講演では、基礎的研究結果をもとに磁性アタッチメントの特長を概説し、いくつかの臨床例を供覧しながら磁性アタッチメントの魅力を再考するとともに、本アタッチメントを成功に導く術式の詳細と新たな可能性について言及したいと考えている。

略歴

1986年 鶴見大学歯学部卒業
1990年 歯学博士(鶴見大学)
日本磁気歯科学会 前理事長, 日本補綴歯科学会 理事